

78 誌上発表 江戸中期の鍼灸における腹部診察と 施術について

山崎 陽子

日本鍼灸研究会

近世日本鍼灸は、基本的に元明鍼灸の影響により形成されたものである。一方、当時の鍼灸には、中国鍼灸には見られない要素が存在する。腹部の診察や施術における腹部の穴の重視もその一つである。これらは現在日本の鍼灸にも直接、間接に影響を及ぼしているが、その出自や由来、系譜は曖昧である。そこで、以下、元明鍼灸が定着した江戸中期前後の鍼灸書に見られる、腹部診察と施術につき、その内容を総括、検討した。底本は『臨床鍼灸古典全集』『鍼灸医学典籍大系』『鍼灸医学典籍集成』の各所収本を使用した。

本論の前に先ず指摘すべきは、わが国の古代及び中世の鍼灸は、隋唐及び宋代の鍼灸を基調として形成されたが、既にその時点で、腹部や下肢の灸穴への施灸が中心となる傾向にあったということである。更に中世以降は、仏教の影響もあり、腹部＝五臓を重視する傾向が強まった。近世に至って、ようやく我が国でも経脈、鍼法、脈診を中心とする診察治療の体系が確立されたが、その初期形態においては、なお中世的傾向は潜在化したといえる。

結論的にいえば、江戸中期前後に出た鍼灸書に見える腹診或いは腹診図は、一般その多くが江戸初期の鍼家・御菌意齋を祖とする意齋流や無分流に由来する。この系統には①著者未詳『鍼治書』(1600年代前半?)、②村上休弥[等]『意齋流針秘伝』(1651年序)、③渡辺東伯『合類鍼法奇化』(1680年刊)、④奥田意仲『鍼道秘訣集』(1685年刊)、⑤安井昌玄『鍼灸要歌集』(1695年刊)、⑥著者未詳『二拾四脈論選要針穴録』(成書年未詳)などがある。たとえば⑥の「腹之見様」では邪実の深さ(表裏)や腎精の虚実、臍下の状態で生死(死後)を診断するための腹部診察の手順が記されるが、これは②の「五臓ノ大事」の「腹見様ノ事」の一部と類似するほか、⑦著者未詳『主治針法』(1677年刊)の「行針腹之見様」、⑧著者未詳『鍼灸拔萃』(1680年)の「腹之見様」、⑨岩田利齋『鍼灸要法』(1686年刊)の「腹心事」、『鍼灸要歌集』の「腹之見様之事」、⑩岡本一抱『鍼灸拔萃大成』(1699年刊)の「腹之見様」、⑪本郷正豊『鍼灸重宝記』(1718年刊)の「腹の見様」、⑫源長起『鍼法要集』(1803年跋)の「按腹之法」の各項にも、ほぼ同内容の記載が見られる。また同じく⑥の「当流伝受奥義」に見える「病ノ頭ニアルモ腹ニ刺、病脚ニアルモ又タ腹ニ刺ス……」は、⑤の「補瀉迎隨之事」、⑪の「当流伝授の奥義」にも見える。よって、⑦～⑫の諸書も、腹診に関する部分は、意齋流や無分流の系列に属すると見られる。なお①の腹診図に類似したものに、⑬佐田房照『鍼灸枢要』(1712年写)の図がある。

意齋流・無分流系統以外で注目すべきものに、⑭高津敬節『鍼灸遡洄集』(1695年刊)の「診腹総論」があるが、これは⑮島浦和田一『杉山真伝流』(1690年代頃成立?)表之巻第二の「診腹之法……」と類似することから杉山流に由来すると考えられる。このほか、⑯垣本鍼源『熙載録』(1782年刊)や、その一部に味岡三伯との関わりが推定される⑰著者未詳『益田流鍼治腹診法』(1764年転写)があるが、その系列を詳らかにしない。

腹部施術では、上記の意齋流関係書に気海穴を重視する傾向が見られるほか、⑱宮脇仲策『鍼治口訣抄』(1714年自序)に「一本ノ鍼ニテ万病ヲ治ス……」として腹部刺鍼について具体的な記述が見られる。

これらを総じて見ると、江戸中期以降の鍼灸における腹部重視は、概ね江戸初期諸派流、特に意齋流・無分流の残響であり、ひいては腹部を重んじてきた中世的要素に淵源すると考えられる。